

下山門乙女田 3

— 下山門乙女田遺跡第3次調査報告 —

2004

福岡市教育委員会

正誤表 (福岡市埋蔵文化財調査報告書第796集『下山門乙女田3』 2004)

頁	行	誤	正
1	図1	〔遺跡位置表示〕	〔→別図〕
2	10	溝からは木製仏像の	溝からは <u>土製</u> 仏像の
2	13	1月から2月にかけて	1月から2月にかけて
3	3	遺構確認から取りかかった。	遺構確認から取りかかった(1区)。
〃	8	1区では、	2区では、
〃	25	龍泉窯系のわんに……所置であるが	龍泉窯系の碗に……少量であるが
6	図6	図6 1・3・176断面(1/100)	図6 1・3・176断面(1/100) *横断面、西からa, b, c, dの順
〃	17	905・910は青磁皿である	905・911は龍泉窯系青磁皿である
12	13	935・944・936は	935・934・936は
26	7	上部の高蓋積材を	上部の横築材を
30	14	〔追加〕	8130は龍泉窯系青磁碗である。
32	3	重複関係にある2基土壙	重複関係にある2基の土壙
38	3	988は内底面を搔き取る	988は内底面の釉を搔き取る
裏表紙	抄録	〔住所〕福岡し	福岡市
〃	〃	〔遺跡概要〕敷布地—平安・鎌倉—?	敷布地—繩文—?—繩文土器・石斧／平安・鎌倉—?



〔図1〕 遺跡位置

しも やま と おと め だ
下山門乙女田 3

— 下山門乙女田遺跡第3次調査報告 —



2004

福岡市教育委員会

卷頭図版



1 1区全景（北から）



2 2区全景（南から）

序

福岡市内では約1,000箇所の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が登録されており、いまなお新たな発見も続いています。一方、開発などの行為により消滅する遺跡も数多くあります。遺跡は早良平野の末端、ごく低い地形の下にも埋没しており、そのひとつが下山門乙女田遺跡です。

福岡市教育委員会では、現状のままで保存できない遺跡について、原因となる工事等に先立ち、記録による保存のための発掘調査を実施しています。今回の調査もそのひとつであり、本書により、その成果を公刊することとなりました。
ここに至るまでには、調査の準備から現場、整理作業の各段階で株式会社地行をはじめとする関係各位の多大なご理解とご協力があったことをここに記し、心からのお礼を申し上げます。

また、本書が下山門乙女田遺跡についての理解を深めるための資料として活用されるところがあれば幸いといたします。

平成16年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 生田 征生

はじめに

- 1 本書は、2002年度（平成14年度）、福岡市西区下山門3丁目470地内において、福岡市教育委員会がおこなった、下山門乙女田遺跡第3次発掘調査の報告である。
- 2 発掘調査は、文化財保護法第57条の2に基づく届出を受け、株式会社地行から福岡市教育委員会が業務を受託し、文化財部埋蔵文化財課が実施した。調査にあたって、株式会社地行を始め、関係各位から種々のご協力とご配慮を頂いた。この場で深く感謝申し上げる。
- 3 発掘調査・整理・本書編集は、教育委員会文化財部埋蔵文化財課杉山富雄が担当した。遺構実測では、阿部泰之の協力を得た。
- 4 出土資料および調査記録は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理し、利用に供する予定である。

凡 例

- 1 本書は、第1次調査『下山門乙女田遺跡』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第170集 1987）、第2次調査『下山門敷町遺跡・下山門乙女田遺跡』（同第727集 2002）を受け、この後、下山門乙女田遺跡の調査が継続することを前提に、書名として『下山門乙女田』を設定し、その第3集とする。
- 2 報告中では、遺物、遺構に対して調査中の記録、整理作業に際して付した通し番号により表記し、これを登録番号とする。
- 3 図中に用いる方位は、磁北であり、真北から6度30分西偏している。
- 4 遺物実測図は、特に記さないかぎり、縮尺3分の1で図示している。その外の縮尺の場合は、遺物番号に続けてそれを付記した。
- 5 本文中陶磁器の分類表記は下記によった。

横田賢次郎・森田勉 1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』〔Dで表記〕

調査番号	0227		遺跡略号	SOM-3
調査地地番	福岡市西区下山門3丁目470		分布地図番号	90(石丸)
工事面積	1,499m ²	調査対象面積	1,009m ²	
調査実施面積	984m ²	調査期間	2002年8月1日～2002年11月10日	

目 次

I 下山門乙女田遺跡第3次調査の経過と概要	
1 調査に至る経緯	
埋蔵文化財事前審査	1
発掘調査	1
2 発掘調査地点の立地と周辺の調査	
下山門乙女田遺跡第3次調査地点の立地	1
既往の調査	3
3 発掘調査の経過と調査成果の概要	
発掘調査の経過	3
調査成果の概要	3
II 下山門乙女田遺跡第3次調査出土の遺構と遺物	
1 溝	
溝1 (図4・5・6・7)	5
溝3 (図4・6・7・10・11・12)	9
溝176 (図6・15)	13
2 横・掘建柱建物	
横4 (図4・17)	13
横643 (図4)	14
柱穴群 (図19・20・21・22)	15
建物644 (図23)	14
建物645 (図23)	18
建物646 (図25・26)	19
建物647 (図28)	21
3 井戸	
井戸147 (図29～31)	22
井戸148 (図33・35)	23
井戸423 (図36・37)	24
井戸428 (図38・40)	24
井戸429 (図41・43)	25
井戸430 (図44・45)	26
4 土壙	
土壙142 (図48・49)	26
土壙143 (図51・52)	27
土壙144 (図54・55)	28
土壙145 (図56・57)	28
土壙146 (図58・59)	29
土壙175 (図61・62)	29
土壙195 (図63・64)	30
土壙198 (図66・67)	30
土壙199 (図69・70)	31
土壙235 (図48・49)	32
土壙327 (図75)	32
土壙436 (図79・80)	33
土壙439 (図81・82)	34
土壙440 (図83・84)	35
土壙441 (図85・87)	35
土壙448 (図88・89)	36
5 その他の遺構	
遺構202 (図93・94)	36
遺構222 (図94)	37
遺構636 (図95)	37
5 その他の遺物	38
III おわりに	39

挿図目次

図1 下山門乙女田遺跡の位置(1:50000)	1
図2 調査地点の位置 (1/2500)	2
図3 調査区東壁土層 (1/60)	3
図4 調査区 (1/200)	4
図5 溝1・3(東から)	5
図6 溝1・3-176断面 (1/100)	6
図7 溝1(西から)	6
図8 溝1出土遺物1 (1/3)	7
図9 溝1出土遺物2 (1/3)	8
図10 溝3(2区 西から)	8
図11 溝3(東から)	9
図12 溝3土層断面 (1/40)	9
図13 溝3出土遺物1 (1/3)	10
図14 溝3出土遺物2 (1/3)	11
図15 溝176(東から)	12
図16 溝176出土遺物1 (1/3)	13
図17 横4(西から)	14
図18 横4-643出土遺物1 (1/3)	14
図19 柱穴群(1区 東から)	15
図20 柱穴群(1区1/100)	16
図21 柱穴649(柱根の遺存 北から)	17
図22 柱穴540(柱根の遺存 北から)	17
図23 挖建柱建物644-645(1/100)	18
図24 挖建柱建物644-645出土遺物 (1/3)	19
図25 挖建柱建物646-648柱穴 (北から)	19
図26 挖建柱建物646-648(1/100)	20
図27 挖建柱建物646-647-648出土遺物 (1/3)	20
図28 挖建柱建物647(1/100)	21
図29 井戸147(東から)	22
図30 井戸147(1/60)	22
図31 井戸147井戸側痕跡(南から)	22
図32 井戸147出土遺物 (1/3)	23
図33 井戸148(1/60)	23
図34 井戸148出土遺物 (1/3)	23
図35 井戸148(北から)	23
図36 井戸423(1/60)	24
図37 井戸423(北から)	24
図38 井戸428(1/60)	24
図39 井戸428出土遺物 (1/3)	24
図40 井戸428(南から)	25
図41 井戸429(1/60)	25
図42 井戸429出土遺物 (1/3-1/2)	25
図43 井戸429(南から)	25
図44 井戸430(1/60)	26
図45 井戸430(西から)	26
図46 井戸430出土遺物 (1/3)	26
図47 土壌群(東から)	26
図48 土壌142(西から)	27
図49 土壌142(1/60)	27
図50 土壌142出土遺物 (1/3)	27
図51 土壌143(東から)	27
図52 土壌143(1/60)	27
図53 土壌143出土遺物 (1/3)	27
図54 土壌144(1/60)	28
図55 土壌144(北から)	28
図56 土壌145(1/60)	28
図57 土壌145(北から)	28
図58 土壌146(北から)	29
図59 土壌146(1/60)	29
図60 土壌146出土遺物 (1/3)	29
図61 土壌175(北から)	29
図62 土壌175(1/3)	29
図63 土壌195(1/60)	30
図64 土壌64(1/60)	30
図65 土壌195(北から)	30
図66 土壌198(1/60)	30
図67 土壌198(北から)	30
図68 土壌198出土遺物 (1/3)	31
図69 土壌199(1/60)	31
図70 土壌198-199(西から)	31
図71 土壌199出土遺物 (1/3)	32
図72 土壌234出土遺物 (1/3)	32
図73 土壌234-235(1/60)	32
図74 土壌235(北から)	32
図75 土壌237(1/60)	33
図76 土壌327出土遺物 (1/3-1/2)	33
図77 土壌416(北から)	33
図78 土壌416(1/60)	33
図79 土壌436(1/60)	34
図80 土壌436(北から)	34
図81 土壌439(1/60)	34
図82 土壌439(東から)	34
図83 土壌440(1/60)	35
図84 土壌440(北から)	35
図85 土壌441(1/60)	35
図86 土壌441出土遺物 (1/3)	35
図87 土壌441(北から)	35
図88 土壌448(1/60)	36
図89 土壌448出土遺物 (1/3)	36
図90 土壌448(西から)	36
図91 土壌642出土遺物 (1/3)	36
図92 土壌642(1/60)	36
図93 道構202(1/5)	37
図94 道構202(南から)	37
図95 道構202出土遺物 (1/3)	37
図96 道構222(東から)	37
図97 道構636出土遺物 (1/3)	37
図98 道構636(北から)	38
図99 柱穴-道構以外出土遺物 (1/3-1/2-1/4)	38
図100 銅錢 (1/1)	39

表目次

表1 報告遺物一覧	1
表2 報告遺物一覧	2

I 下山門乙女田遺跡第3次調査の経過と概要

1 調査に至る経緯

埋蔵文化財事前審査

2002年5月30日付けで西区下山門3丁目470地内における共同住宅建築計画について、福岡市教育委員会に株式会社地行より、埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。埋蔵文化財課では、計画地すでに実施していた試掘調査により、埋蔵文化財を確認していたことから、当該計画内容について原状での保存措置の検討を行った。しかし、工事計画の内容から地下の埋蔵文化財に対する影響は避けないと判断し、やむなく記録保存の措置をとることとした。

発掘調査

記録保存のための発掘調査は、株式会社地行の委託を受けて福岡市教育委員会が実施することとなった。教育委員会では文化財部埋蔵文化財課を担当とし、準備工事の完了を待って2002年8月1日から下山門乙女田遺跡第3次調査として現場作業に着手した。

発掘調査は工事による掘削が及ぶ範囲1,009m²を対象とした。廃土を場内処理することになったことから、調査区を南北に2分割して南半部を1区、北半部を2区として、1区の表土鋤取り、調査から着手した。1区をおわり、10月中旬に土砂を反転して2区の調査を完了したのは11月10日である。

1・2区併せ調査面積は984m²となった。

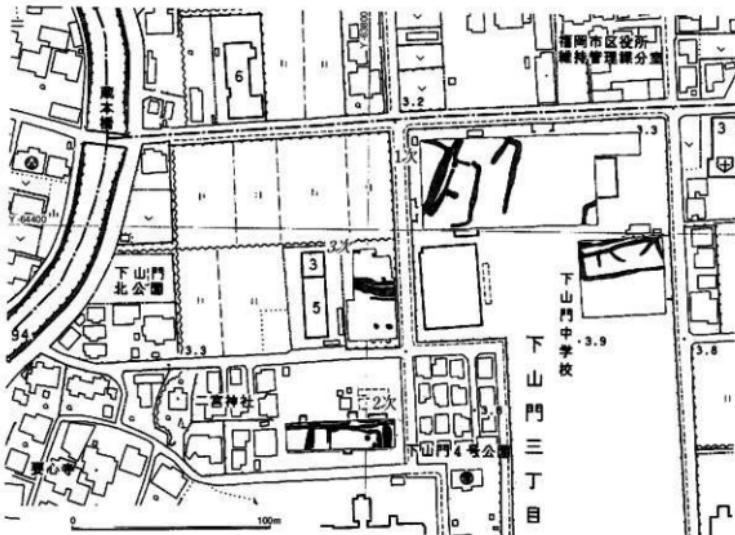
2 発掘調査地点の立地と周辺の調査

下山門乙女田遺跡第3次調査地点の立地

早良平野西部の室見川と十郎川との間は沖積低地が広がっている。博多湾に面した愛宕山から小戸にかけて点在する第三紀層の残丘の間には砂州が発達しその上に砂丘が生成する。これらによつて閉ざされた内陸側はきわめて低湿な後背湿地となり、水田化されて現代に至っている。低湿地中には第三系の残丘矢、砂丘状の微高地が分布する⁽¹⁾。下山門乙女田遺跡はそのような景観の中に立地している。周辺は学校建設に始まり、いまも宅地化が進行するなど、盛土造成が行われて大きく変貌している。しかし、調査地点は水田で、田面の標高が2.7mの位置にあって旧状を知ることができる。現在は1枚の田面であるが、断面を見ると、かさ上げための客土層によって北側がごくわずかに低かったことわかる。また、西方100mには十郎川の蛇行部の自然堤防上に立地すると思われる集落、北東200mの位置には、上述の砂丘状微高地が位置している。



図1 下山門乙女田遺跡の位置 (1/50,000)



3 発掘調査の経過と調査成果の概要

発掘調査の経過

調査対象地の南側2/3について、表土鋤取りを行い、遺構確認から取りかかった。地山は、低湿地という立地を反映して、シルトと粘土の部分とがあった。遺構は非常に密集しており、かつ、覆土が確認しづらい遺構もあり、遺構検出、重複関係の検討に手間取った。なおかつ、降雨時には調査地周囲の道路から雨水が調査地に流れ込んでしばしば冠水した。このため、地山がシルトの部分では、地山自体が流出し、遺構の形状が大きく損なわれることになった。特に柱穴群でそれが著しかった。

1区では、時季的なこと、地山が粘土質であったことから雨水の影響は小さかった。ここでも、密集した小穴群を検出したが、1区のそれとは形状、覆土の特徴など異なり、人為的でないものが含まれている可能性が考えられた。

調査成果の概要

土層と調査面 1区東壁の土層断面を示す(図3)。水田耕土、床土層直下で遺構が検出される部分と、薄く包含層が残る部分とがある。土層4と5と同性状の覆土をもつ遺構がほとんどである。

出土遺構 トレンチを除き、遺物が出土するか、何らかの観察を行って台帳に登録した遺構は653基である。大半は柱穴を含む小穴である。このなかで柱穴あるいはその可能性があるとしたものは110基ある。明確な柱穴は1区の中央部に集中し、何らかの建物の平面企画を思わせるような分布をしている。ただし、上述したように遺構の崩落、重複が密にありすぎてここの柱穴を確認できなかつたなどが原因して、建物の復原は全く不十分なものにおわった。

土壤としたのは110基、うち、23基が、底に薄く砂層を遺す隅円四辺形の土壤かそれに類する土壤である。その分布は調査区南辺部及び、溝北側に接する部分に密集している。

さらに、井戸6基、溝3条、柵1(+1?)のほか、銅錢を埋置した遺構2を調査した。

出土遺物 総量でコンテナ17箱ほどの量が出土した。大部分は土器で、平安時代末から室町時代おわり頃の年代にわたる資料である。土器は細片化したものが大半である。中でも糸切底土師器が多くを占める。土師器は、一括投棄された状態で多数出土した資料もある。輸入陶磁器は白磁では碗・皿、碗は玉縁碗が顕著である。青磁では龍泉窯系のわんに資料が多く、年代の幅も大きい。所領であるが壺、鉢といった器形野輸入陶器がある。土師器、瓦質土器で鍋、擂鉢、湯釜などの器形も細片であるが、例数が多い。瓦はごく細片で少数出土した。石製品には石塔断片などが含まれている。

- (1) 下山正一・磯原1993「拾六町平田道路周辺の地質と地形」「拾六町平田道路2」福岡市埋蔵文化財調査報告書第349集
- (2)・(3) 凡例1参照。

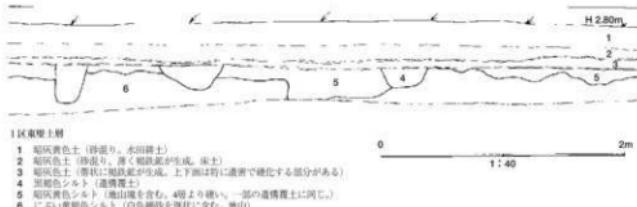


図3 調査区東壁土層(1/40)



図4 調査区 (1/200)

II 下山門乙女田遺跡第3次調査出土の遺構と遺物

以下、溝、櫛・掘建柱建物、井戸、土壙、その他の遺構の順に記述する。

1 溝

溝1 (図4・5・6・7)

調査区中央を東西に走る。櫛4と重複して古い。土壙331よりも古い見えるが不明瞭である。

平面では調査区西に寄って鍵の手にわずかに曲がる部分が見て取れる。この部分より西の溝底は広く、比較的平坦である。一方東側では断面で漏斗状に狭まり、やや深くなる。岸部は南側ではごく緩い傾斜となる。一方北岸は比較的傾斜が強い。これは、北岸がもともと南岸より高かったためかもしれない。西端部で溝の幅3.0m、東端部では4.6mを測る。溝底は西端部で標高1.7m、中央部で1.5m東端部では1.4mを測る。東半部では部分的に深みがあり、穿掘かと思われる。溝底は全体としては東に傾斜する。屈曲部の覆土には疊が集中する。この部分は溝底の傾斜から考えると水流が直に当たる位置にありそれが護岸としての意味を持ったものかもしれない。覆土は黒褐色の粘土で岸部に砂層を薄く挟む。溝中央では極薄い砂層を挟む部分をわずかみるほかは一様な粘土である。

出土遺物 (図8・9、表1) 総量でコンテナ2箱ほど出土した。細片～小破片の土器片がほとんどである。疊群中部に比較的多く出土したほかは特に精密を観察することはできなかった。土器器表は移動による大きな擦れなどもない。土器総量の8割は鉢形土器で、1割が土師器壺皿、残りが陶磁器という構成である。



図5 溝1・3 (東から)

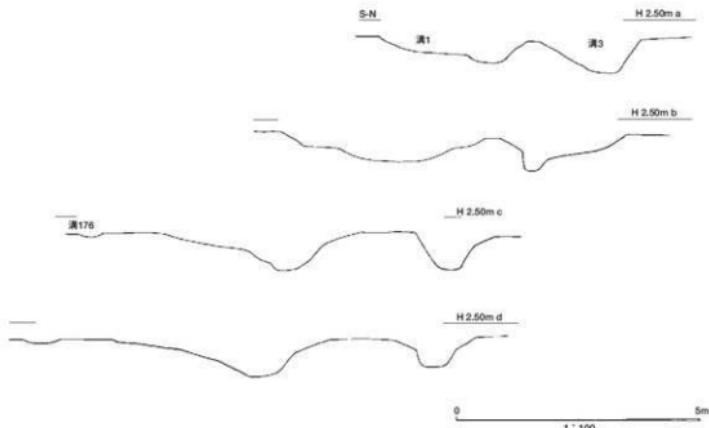


図6 1・3・176断面 (1/100)

土師器には、特徴的なものが少量混じる。

白磁は各時期のものが少量づつ含まれる。13世紀から16世紀までの幅がある。

青磁は龍泉窯系の資料がほとんどであるが、時代の幅があり、15、6世紀に及ぶ資料が含まれている。小形の陶磁器には李朝朝鮮の資料、明染付の資料が含まれる。

鉢形の土器には擂鉢、鍋などがある。擂鉢は大部分が土師器で極少量瓦質土器がある。備前系も混じる。東播系須恵器も極少量ある。火鉢、足付き鍋も出土したほかに、内耳鍋とみられる細片資料もある。

鋳造関連の資料として鉄滓のほかに坩堝あるいは取瓶と見られる断片資料がある。瓦は少量土師質の資料が見られる。石製品には挽き臼、砥石、石鍋がある。金属製品には鉄釘がある。古代からの遺物も少量含まれる。

土師器壺皿は形状の変異が大きく、壺と皿との区分が曖昧である。886・885・887を皿とする。888・891・889・892・890を壺とする。891・892・890は底部が薄く均一で、胎土も精良な資料である。口縁部も大きく開く。

901・899・897・898・900・902・903

は白磁である。小形の器形が大きい。898は16世紀代とされる資料か。

905・910は青磁皿である。

909・906・907・908・911は龍泉窯系の青磁碗である。906・907は口縁部外面に雷文帯をもつ。

893・894・895・896は染付碗である。

口縁部の内外面、高台基部に条線を描く。



図7 溝1 (西から)

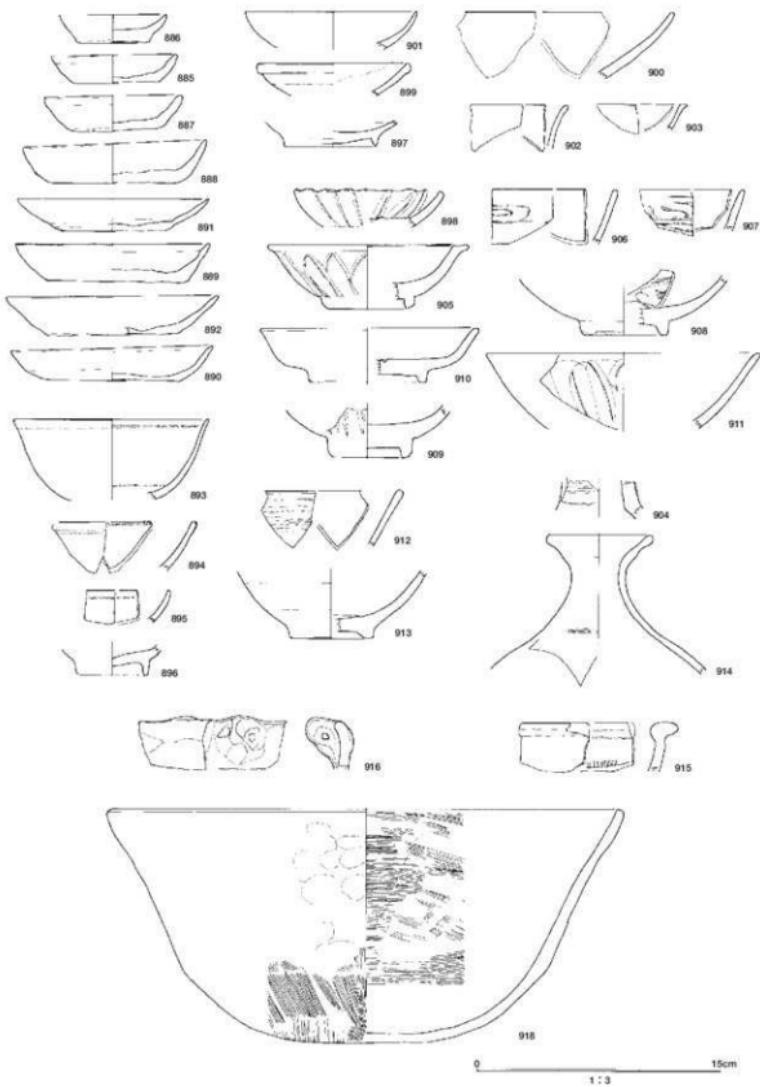
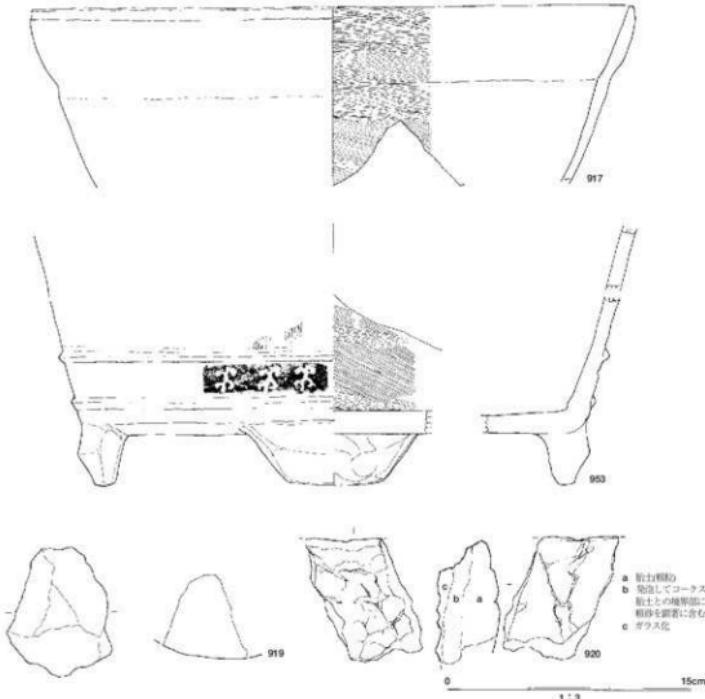


図8 溝1出土遺物1 (1/3)



912・913は粉青沙器碗である。

904は瓶の頸部か。

914は陶器瓶である。朝鮮製か。

915は陶器擂鉢である。

916は土師器内耳鍋。

918・917は土師器鍋である。

918は全形を復原できる資料である。
体部外面に厚く煤が付着し、内底面の
一部に炭化物と見られる付着が残る。

953は土師器火鉢である。

919は鋳型若しくは取瓶の一部か
球状の外表面の一部が遺存する。胎土
は多孔質の砂で被熱している。920
は坩堝か、口縁部の細片である。内
面はガラス化している。





図11 溝3（東から）

溝3（図4・6・7・10・11・12）

調査区中央、溝1に平行して走る。溝1とはほぼ同じ位置でやはり鎌の手状に屈曲する。岸の立ち上がりは溝1より急である。底面の高さは西端部で標高1.5m、中央部で1.5m、東端部では1.7mを測り、わずかに東から西へ傾斜している。これは溝1とは逆である。覆土は黒褐色粘土で壁に沿って薄くシルト・砂の薄層を挟む部分がある。性状は溝1に似ている。

西端部の幅2.4m、中央部3.0m、東端部で1.4mを測る。

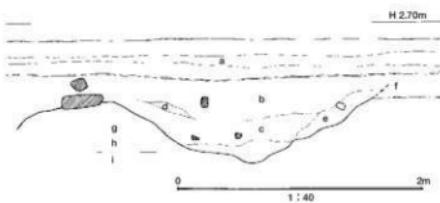


図12 溝3土層断面 (1/40)

- a: 黒褐色土・灰土・粗砂上
- b: 粗砂を含むシルト層灰黄色 [2.5V 42]
- c: シルト
- d: 粗砂
- e: 粘土 (粗粒やや小)
- f: 泥合層 (堅硬帶)
- g: 地山: シルト (砂質), 灰灰黄色
- h: 地山: シルト (砂質), 灰灰黄色 (やや堅)
- i: 中砂~粗砂, 灰白色

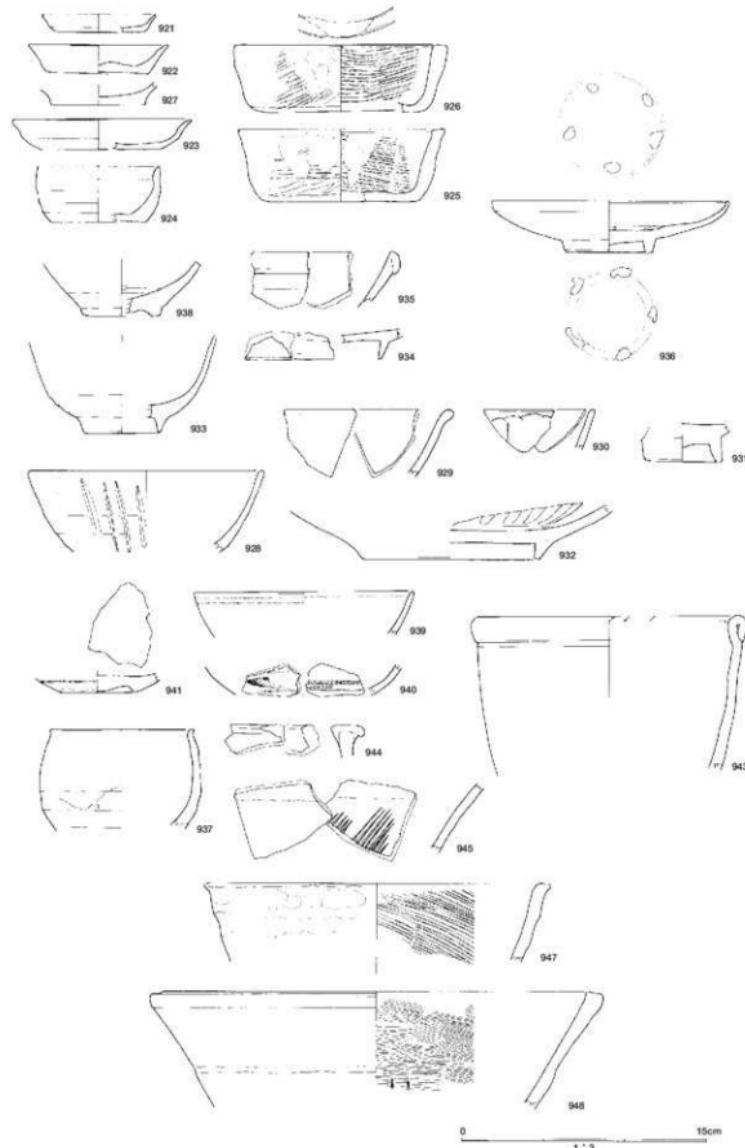


图13 漢3出土遺物1 (1/3)

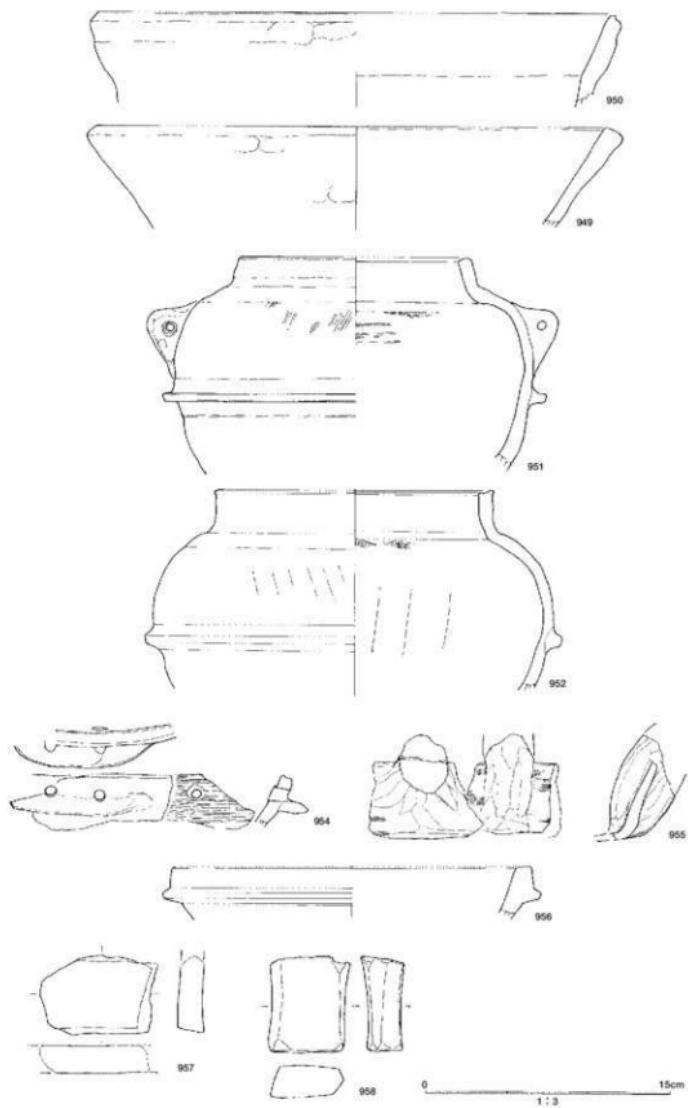


図14 漢3出土遺物2 (1/3)

出土遺物 (図13・14、表1) 総量ではコンテナ1箱ほどの分量であるが、多種にわたる遺物が含まれている。土器器表の遺存度は良好で、長い距離を移動したとは考えられない。土器類の1割が土師器壺皿で、その1/2ほどの分量で陶磁器が出土している。残る大部分は鉢形の土器類である。

土師器壺皿類は細片化しているが、接合して全形を復原できる資料が含まれている。形状が復原できるものについては、壺では小形で胎土が精良なものと、比べて胎土が粗いものとがある。前者は器厚が薄く、底径が小さいようである。

陶磁器についてはほとんどが磁器で、青磁、白磁、染付の順に多い。朝鮮陶磁器を散見する。土器鉢類では湯釜が顕著である。さらに鍋、足付き鍋、火鉢がある。擂鉢は比較的少ない。瓦は土師質の資料がある。石製品に砥石、石鍋がある。鉄滓も出土する。古代の須恵器も混じる。

921・922・927・923は土師器皿である。いずれも外底面に板目は見られない。924は口径に対して器厚の大きな土師器である。体部も急に立ち上がる。土師器926・925は鉢である。内外面に刷毛目調整を行なう。外面にはさらに指押さえが加えられる。

938・933・935・944・936は白磁である。936はほぼ全形が遺存する。内外の底面の対応する5箇所に目痕が残る。

928～932は青磁である。932は盤である。

941・939・940は染付皿である。937・943は陶器鉢、945は陶器擂鉢である。

947は土師器鉢か。土師器948は擂鉢である。ごくわずか櫛目が残る。950・949は鍋である。

951・952は瓦質土器湯釜である。952の鉢の端面以下に煤が付着し、部分的に火跳ね状に器表が剥落する。

954は土師器耳鍋である。紐穴の下に耳状の板を貼り付ける。

955は熔炉である。体部を2枚の粘土紐で挟み、合わせて整形し柄とする。

956は石鍋である。

957は平瓦、958は



図15 溝176（東から）

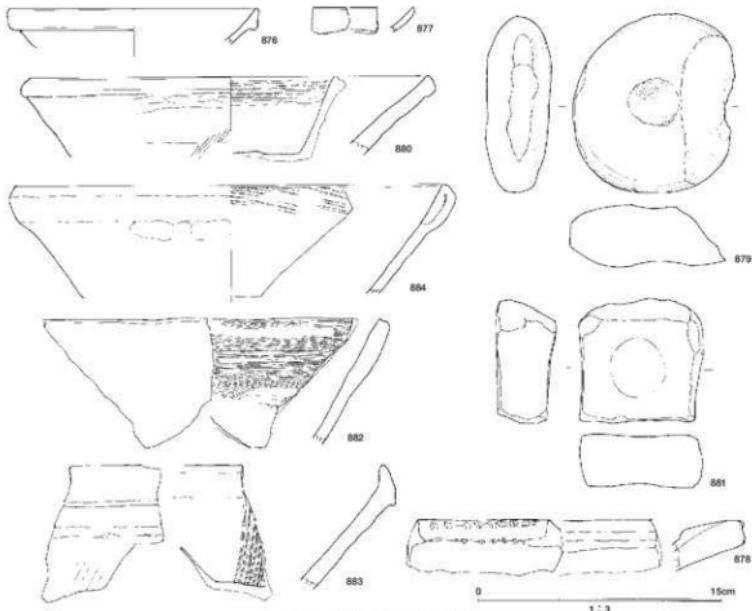


図16 溝176出土遺物1(1/3)

砥石である。砥面が6面を構成している。

溝176 (図6-15)

溝1の南側に平行して走る。浅く、調査区半ばで止まる。底面は平らで、砾を多量投入されている。覆土は粗砂混りの黒褐色粘質土である。流水の痕跡はない。

出土遺物 (図16、表1) 遺物は少量出土した。土師器壺皿は極少なくかつ、器表の荒れが著しい。鉢形の土器が大部分を占める。鉄滓、石製品が出土している。弥生土器、須恵器も極少量だが出土している。また、壁土の出土もあった。卵大で、断面にスサの痕跡が残る。被熱している。

876は白磁碗、877は皿である。880は瓦質土器擂鉢、884・882は瓦質土器鍋、883は備前系陶器擂鉢である。

879は叩石、881は砥面をもつが対応する面の中央にくぼみがあり、叩石ともできる。

878は甕棺口縁部破片である。

2 檻・掘建柱建物

檻4 (図4-17)

調査区中央、溝1の走行に沿い、溝1の中央を東西に走る檻である。檻柱は掘形に立てられた掘建柱で、明確な柱痕跡を残す。柱穴の径は0.2~0.4mの幅がある。深さは調査面から0.3mないし0.4

mほどである。柱間は西から、柱穴芯芯間の距離で、以下のようになる。

柱穴194-193 27m
柱穴193-192 28m
柱穴192-191 28m
柱穴191-190 27m
柱穴190-187 26m
柱穴187-189 29m
柱穴189-186 28m

出土遺物（図18、表1） 遺物は柱穴186、189、187、191、193から極少量づつ出土した。土師器壺皿、湯釜、鍋、鉢の細片がある。

851は土師器湯釜で柱穴186出土。852は土師器鍋、853は土師器捏鉢とともに柱穴191出土である。



図17 横4（西から）

横643（図4・20）

横643とすることは1区柱穴群の南を限る柱列を考えた東西方向に並ぶ小穴である。その間隔は不規則で、小穴の形状も一定でなく1~2mの幅があり、不確実であるが、ここを境に南側に柱穴の分布がほとんど無くなる。小穴28・29・38・55・52で、これ以東は小穴、柱穴の密集した中で追うことができない。

出土遺物（図18、表1） それぞれの小穴からごく少量づつ出土した土師器壺皿の外に青磁、鐵滓、古代の須恵器がある。青磁では雷文帶をもつ龍泉窯系統の資料がある。

854は糸底土師器皿である。外底面に板目は見られない。小穴52出土。

855は青磁碗である。口縁部の細片で口縁端外面に1圈線がある。軸下に化粧掛けを行なう。小穴55出土。

横4



横643

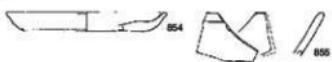


図18 横4・643出土遺物（1/3）

柱穴群（図19・20・21・22）

今回調査では、柱穴を含めた小穴が高い密度で出土した。それは、1区北半分と2区に密に分布している。このうち、2区の小穴は、調査時の所見として、形状の不整、不明瞭なものが多く、柱痕跡を認めないものも多い。また、一見してわかるような柱列も認められないことから、1区のそれとは異なる性質のものであると考えられる。1区の小穴は2区のそれと対照的に柱痕跡、根石など柱穴としての明確な痕跡を残している。また、一見して柱列とわかる配置も各所に認められた。

以下、1区について記述する。

柱穴群の範囲 南は上述の樋643までで、その南には土壌が密集する空間がある。柱痕跡、根石、柱根の残る柱穴がある。北は溝176までである。このうち、調査区の東半部では土壌と重複した状態が顕著で、柱穴の規模もやや異なるように見える。根石も比較的浅い位置で確認できる遺構も多い。このことから、残る西半部について建物の復原を試みた。

概要で触れたように、調査時期が周囲の灌漑用水路に通水する時期で、なおかつ夏から秋にかけての降雨もあって、何回か冠水し、柱穴の集中する部分の地山がシルト層であったことから掘り上げた遺構の壁が崩落し掘りあげ時の形状を失ってしまったことで、建物平面形の検討は、かなり困難な作業となった。結果として柱列を含めて以下の5基を復原した。

建物644（図23）

図示するうち、西側の柱列を基準に検討して復原した。柱穴650を基点に柱穴259・249はいずれも根石に円錐を敷き底面の深さもよく揃う。259・249は柱痕跡も残る。この延長上に33・30が



図19 柱穴群（1区東から）

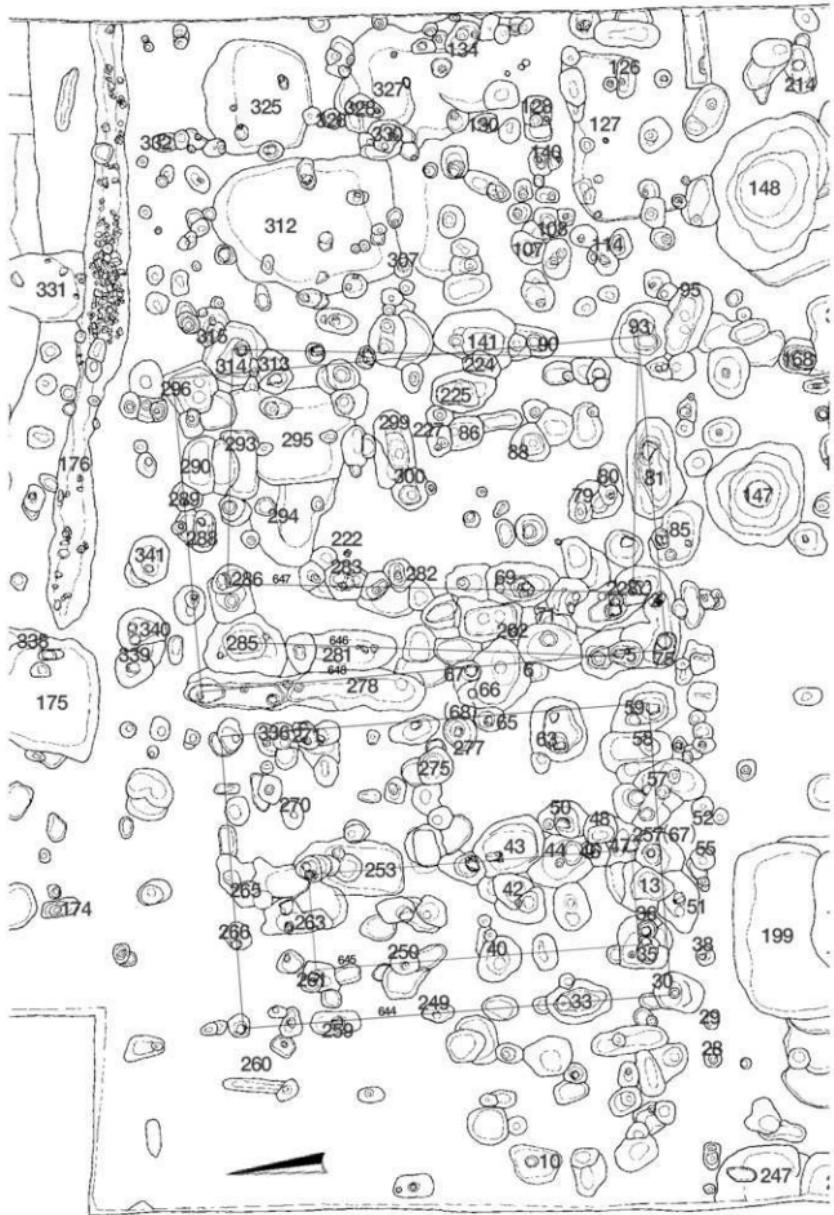




図21 柱穴649（柱根の遺存 北から）



図22 柱穴540（柱根の遺存 北から）

271-651: 20m, 651-63: 28m, 63-59: 20m

北側) 650-266: 18m, 266-652: 26m, 652-270: 1.7m

出土遺物（図24、表1） 柱穴からは少量の遺物が出土した。

柱穴271 951は土師器皿である。口径に対して底径が小さい。外底面には撫で調整若しくは指押さえの痕跡がある。960は白磁皿、961はごく細片の土器口縁部である。貼り付けによる口縁は短く、外反する。縄文土器か。

柱穴63 964・962・963は糸切底土師器坏である。いずれも外底面に板目は見られない。

柱穴59 966・965は糸切底土師器で966は皿、965は小形の坏か。967は白磁皿である。化粧掛けを行なう。968-969は青磁碗である。蓮弁文を描きする。

柱穴57 970は紡錘形の土錐である。

柱穴30 971は糸切底土師器坏で内面を丁寧に撫で調整する。972は白磁皿である。

のる。650から直角に東へ折れると柱穴266・270がある。30、270を隅柱として折れると交点に柱穴65があり、これらの間を埋める柱穴を抽出すると図示する平面企画の建物を復原できた。ただし、東側柱列、南側柱列とするものは、遺構間の重複が著しく柱穴としての単位を判断できない部分が多い、柱穴底面が上下している点また、こうして選定した柱の間隔が一定しておらず、柱穴の規模、根石の設置状況からして大規模な建物が想定できることからすると、疑問な点も残る。

以上から梁行3間×桁行4間の南北棟建物644を復原した。隅柱間の距離でいうと3m×9mの規模となる。柱間の距離を以下に示す。

西側) 650-259: 2.0m、
259-249: 2.0m、249-33: 2.6
m、33-30: 2.3m

南側) 30-51: 2.0m、51-57:
2.2m、57-59: 1.7m

東側) 270-271: 1.8m、

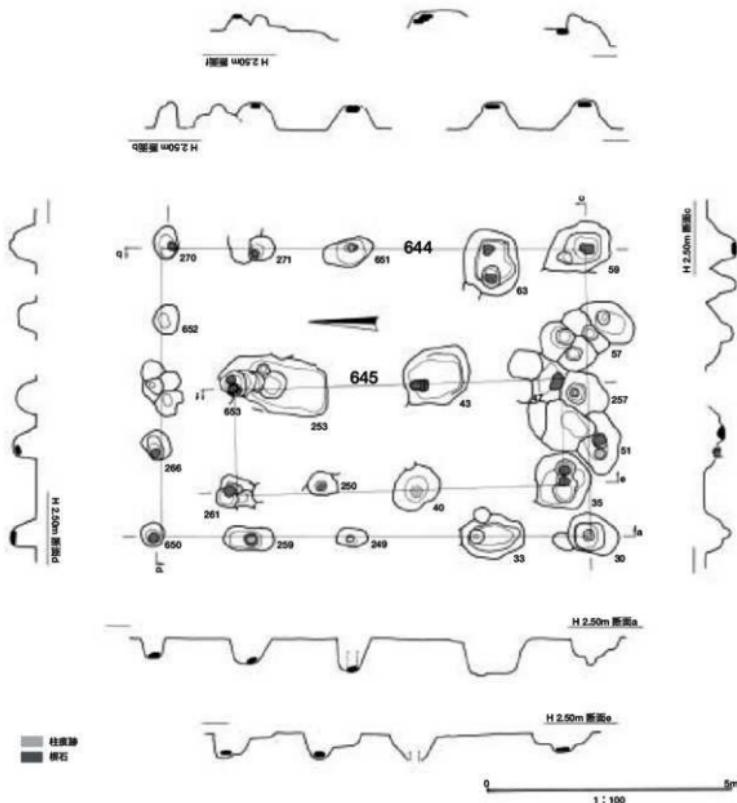


図23 挖堀柱建物644・645 (1/100)

建物645 (図23)

建物644の内側に位置して、やや軸を違える建物である。柱穴が土壤と重複して残っていないことを想定して1間×3間の南北棟を復原した。隅柱間の距離でいうと2.2m×6.8mの規模となる。柱間の距離を以下に示す。

西側) 261-250: 1.8m, 250-40: 2.0m, 40-35: 3.1m

南側) 35-47: 2.2m

東側) 653-○+○-43: 3.8m, 43-47: 3.0m

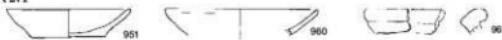
北側) 261-653: 2.1m

出土遺物 (図24、表1) 柱穴からは少量の遺物が出土した。

柱穴253 861は糸切底土師器環である。860は口禿の白磁皿である。

建物644

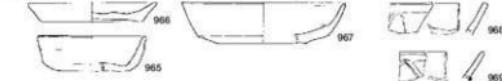
柱穴 271



柱穴 63



柱穴 59



柱穴 57



柱穴 30

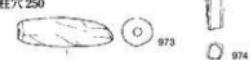


建物645

柱穴 253



柱穴 250



0 1:3 15cm

図24 挖建柱建物644・645出土遺物 (1/3)

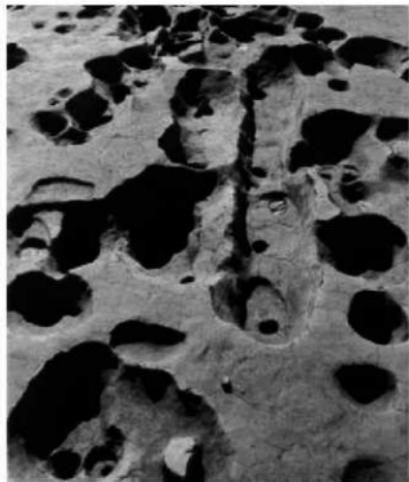


図25 挖建柱建物644・645柱穴 (北から)

柱穴250 973は土鍤である。974は鉄釘の断片である。

建物646 (図25-26)

建物644と向きを同じくして東に並ぶ建物である。布掘りの柱穴を含む。3間×4間の南北棟を復原した。隅柱間の距離でいうと6.5m×9.5mの規模となる。柱間の距離を以下に示す。

東側の柱列は復原線よりやや膨れた位置に柱穴が位置することとなる。

西側) 656-657: 2.0m, 657-658: 2.0m,
658-66: 2.0m, 66-75: 3.4m

南側) 75-654: 2.3m, 654-81: 1.9m,
81-93: 2.1m

東側) 296-313: 2.0m, 313-655: 2.2m,
655-141: 2.0m, 141-93: 3.4m

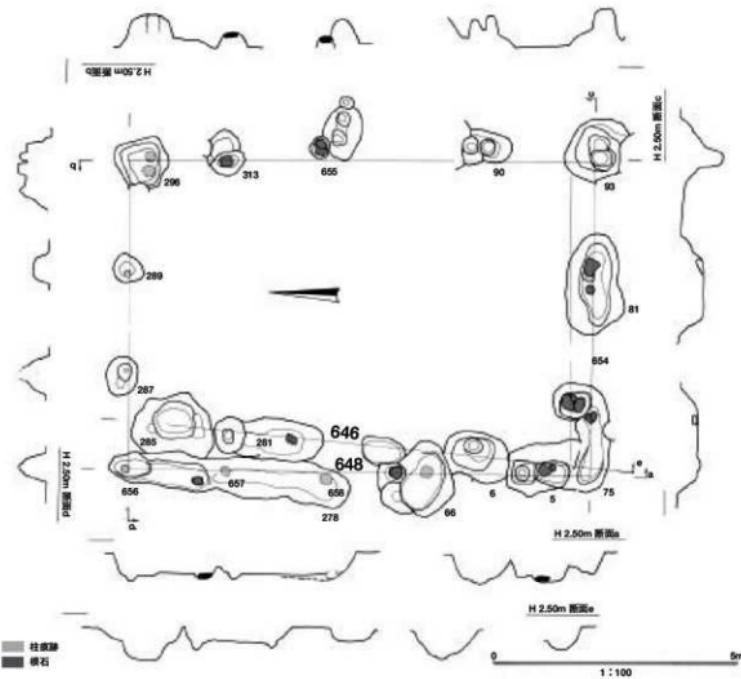
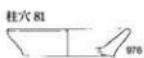


图26 挖建柱建物646·648柱穴 (1/100)

建物647



建物646



柱列648



图27 挖建柱建物646·647·648出土遗物 (1/3)

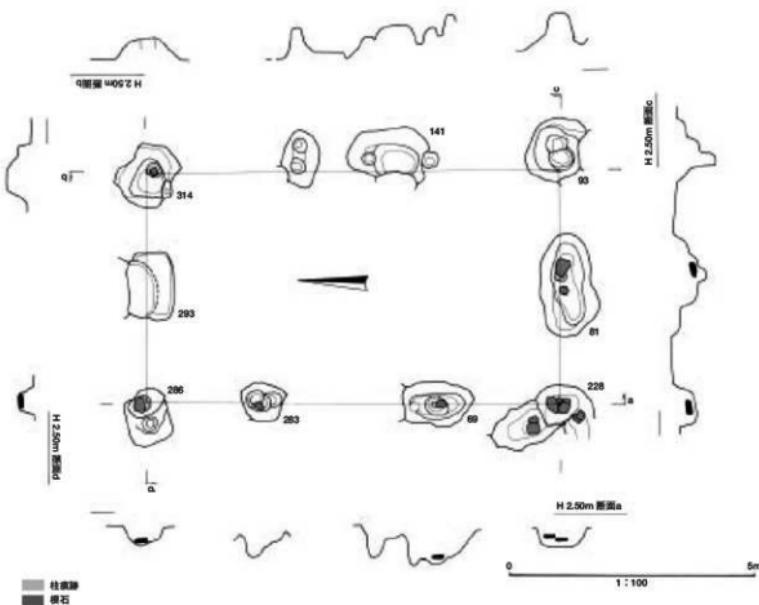


図28 挖建柱物647 (1/100)

北側) 656-287: 20m、287-289: 2.0m、289-296: 22m

出土遺物 (図27、表1) 柱穴からは少量の遺物が出土した。

柱穴66 980・979は糸切底土師器壺である。981は土錘である。

柱穴278 982・977・983は糸切底土師器皿である。977の外底面には撫で調整が、内底面には指押さえが行なわれる。984は青磁盤である。

建物647 (図28)

建物646と重複し、やや方向を違える建物である。2間×3間の南北棟を復原した。隅柱間の距離でいうと4.8m×8.5mの規模となる。柱間の距離を以下に示す。

西側) 286-283: 2.4m、283-69: 2.3m、69-228: 3.7m

南側) 228-81: 2.4m、81-93: 2.4m

東側) 314-658: 2.5m、658-141: 20m、141-93: 3.8m

北側) 286-○+○-314: 48m

出土遺物 (図27、表1) 柱穴からは少量の遺物が出土した。

柱穴313 975は土錘である。

柱穴81 976は糸切底土師器皿である。978は白磁碗である。

柱列648 (図26)

建物647と重複し、やや方向を違える。折れて対応する柱列を抽出できなかった。4間の南北方向の柱列を復原した。両端の柱間の距離でいうと8.7mとなる。

出土遺物 (図27、表1) 柱穴からは少量の遺物が出土した。

柱穴6 856は糸切底土師器坏、857・858は龍泉窯系青磁で、857は盤、858は瓶頸部である。

3 井戸

井戸147 (図29~31)

調査区南辺部の土壌群とその北の柱穴群との間の構造がまばらな空間に位置する。平面では不整な円形でやや漏斗状の掘形をもつ井戸である。粘土質の覆土は全体に一樣である。掘形底面で桶形の井戸側に使用していたものと見られる竹を編んだ「たが」が原位置を留めて遺存しており、これから井戸側の存在をすることができ、井戸側を抜き取った後、埋め戻したことわかる。また、井戸側の径0.5mを復原できる。井戸掘形は径2.1m、底面の径0.9m、深さ1.5mを測る。

出土遺物 (図32、表1) 覆土中からごく少量遺物が出土した。ほぼ完形となる1点をのぞいて細片の資料である。土師器坏・皿の外に備前系と見られる陶器、土師器鍋、土師質の平瓦、灰釉陶器、銅錢がある。

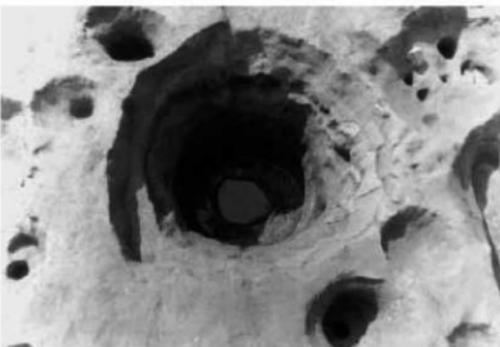


図29 井戸147 (東から)

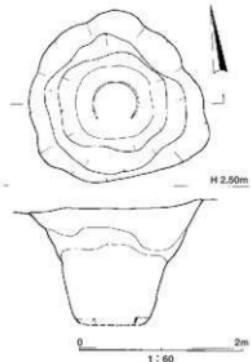


図30 井戸147 (1/60)

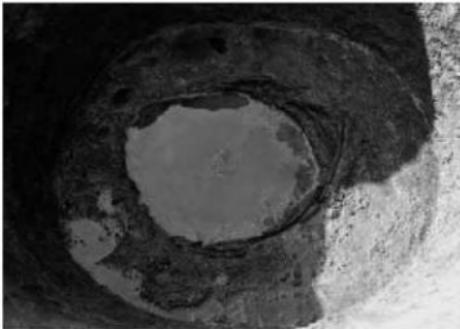


図31 井戸147井戸側痕跡 (南から)

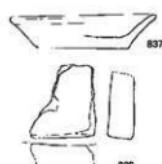


図32 井戸147出土遺物 (1/3)

837は糸切底土師器坏である。ほぼ完形の資料である。体部は底部から外反しながら大きく開く。口径90、底径56、器高22を測る。

838は平瓦細片である。土師質で胎土に粗砂を多量に含む。

994は緑釉陶器である。細片のため図示しないが、碗の底部で、土師質の胎土に釉が部分的に残る。低い高台がつく。施釉部は灰黄緑色を呈す。213(図100)は、「天聖元寶」である。

0 10cm
1:3

井戸148 (図33-35)

井戸147から4m東に離れて、同様な空間に位置する。平面は不整な楕円形で、断面では逆台形状を呈し、上部が開く。壁面は凹凸が著しい。覆土は黄灰色の粘質土で地山シルトの塊を多量に含む。木炭も含んでいる。井戸147と同様埋め立てられたものであろう。平面の規模は長さ3.4m、幅2.5m、底面では径1.1m、調査面からの深さ1.2mを測る。

出土遺物 (図34、表1・2) 覆土中から少量遺物が出土した。土器表面はやや擦れている。

糸切底土師器坏皿が半ば以上を占める。底部の厚いものと薄いものがある。後者は体部が外反気味に大きく開くもの

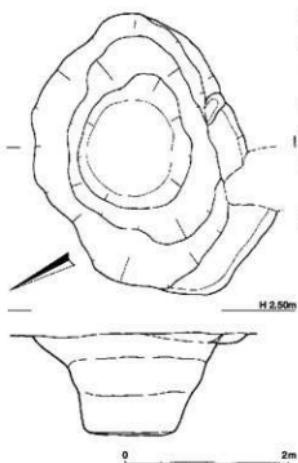


図33 井戸148 (1/60)

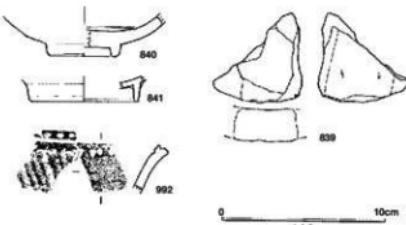


図34 井戸148出土遺物 (1/3)

である。

陶磁器では龍泉窯系青磁、白磁があるほかに備前系かと思われる細片がある。擂鉢土師器、瓦質土器がある。

840・841は龍泉窯系青磁である。839は平瓦である。土師質で上下面を板状の工具で撫てる。

992は繩文土器である。曾畠式土器の口縁部である。

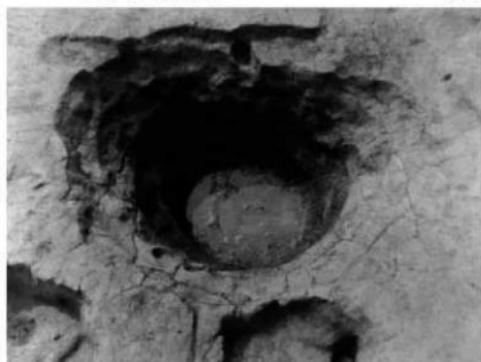


図35 井戸148 (北から)

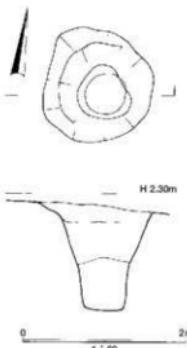


図36 井戸423 (1/60)



図37 井戸423 (北から)

井戸423 (図36-37)

2区でも他の井戸群とは離れた、溝3に接した位置にある。平面では不整な円形状、断面では漏斗状に上部が広がる。覆土下半部に人頭大の礫を投棄している。覆土は黒褐色粘質土である。平面の規模は径1.4m、底面では径0.5m、調査面からの深さ1.3mを測る。

出土遺物 覆土中からごく少量遺物が出土した。土器は細片化し磨耗している。糸切底土師器、龍泉窯系青磁碗、土師器擂鉢および鍋、瓦質足付き鍋が出土した。

井戸428 (図38-40)

調査区北辺の井戸群に属する。調査区北西隅に半ばかかっている。平面が円形で、擂鉢状の掘形をもつ井戸である。井戸側は上部が抜き取ったのち埋め立てている。覆土は灰黄褐色の粘質土である。井戸側は木桶形で最下段のみ遺存した。遺存する井戸側内は底部近くには粗砂、中程までは砂と粘土が縞状に堆積している。

復原される掘形の径は3mほど、調査面からの深さ1.9m、井戸側の径は0.7mである。

出土遺物 (図39、表1) 覆土中からごく少量遺

物が出土した。土器は細片である。糸切底土師器、白磁、陶器壺、平瓦がある。

842は糸切底土師器壺である。

843は口禿の白磁碗である。

844は平瓦で、土師質で下面に格子目の叩き痕を残す。上面を焼す。

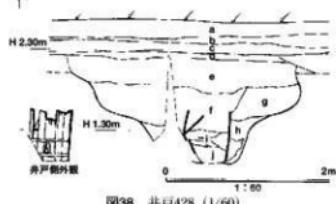
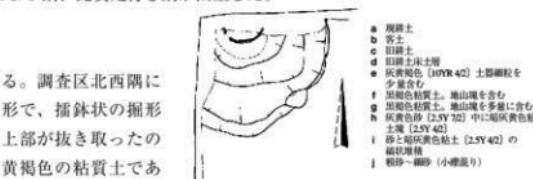


図38 井戸428 (1/60)

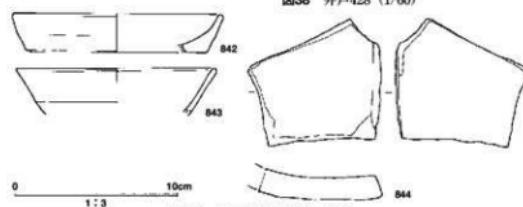


図39 井戸428出土遺物 (1/3)



図40 井戸428（南から）

井戸429（図41・43）

井戸428に接して東に位置する。平面が円形で、擂鉢状の掘形をもつ井戸である。断面では袋状に一部がえぐれしており、素掘りの井戸の可能性を残すが、底部近くで井戸側の痕跡を確認した。木桶形の井戸側で、南西側には裏込めのように礫が積まれている。この位置が掘形のえぐれ部に一致し、あるいは崩落のため補強を行なったものかもしれない。掘形埋土は黒褐色シルト、掘形覆土には粗砂の薄層を挟んでいる。

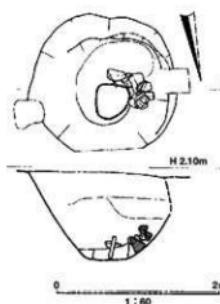


図41 井戸429（1/60）

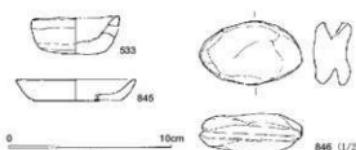


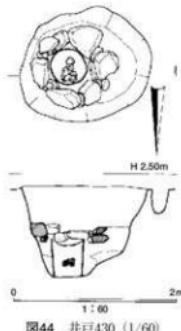
図42 井戸429出土遺物（1/3・1/2）

845は糸切底土器器皿である。

846は土錘である。紡錘を押し潰したような粘土塊の長軸に沿って切り込み、図上、下方向に押し広げることで、紐掛け溝を作り出している。



図43 井戸429（南から）



井戸430 (図44-45)

調査区2区の一群のうち、東に位置する井戸である。平面が楕円形で、鉢鉢状の掘形をもつ井戸である。下部の井戸側が遺存する。最下段のみ木桶形の井戸側で、それより上部は石組みとする。やはり埋め立てられており、その際、上部の高蓄積材を井戸側内に投棄している。覆土は黒褐色シルトである。掘形は平面で1.7m、幅1.3m、底面までの深さ1.1mである。井戸側の径は底部で0.4mほどである。

出土遺物 (図46、表2) ゴク少量遺物が出土した。ほとんどが細片の資料である。半ば以上は糸切底土師器である。薄く胎土が精良で、体部が大きく開く器形がある。

白磁847は内底面の軸を輪状に掻き取る。849は皿である。

848は素焼きの把手である。瓶のような器形が考えられよう。

4 土壙

土壙142 (図48-49)

調査区南辺部の土壙群に含まれる。一部が調査区外となるが、隅円の長方形であることがわかる。断面は逆台形状長さ2.6m以上、幅2.2m、深さ0.3mを測る。覆土は一様で黒褐色シルト。

壁際と底面直上に地山土ブロックがある。壁際では流れ込みのような状態を示している。この種の土壙に通有の底面の粗砂層がない。



図45 井戸430 (西から)

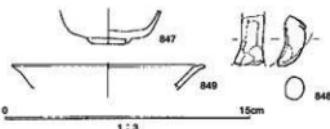


図46 井戸430出土遺物 (1/3)



図47 土壙群 (東から)

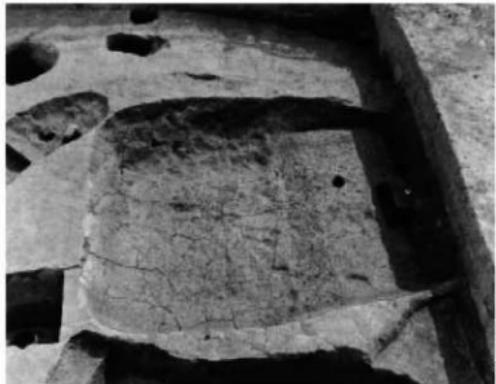


図48 土壙142（西から）

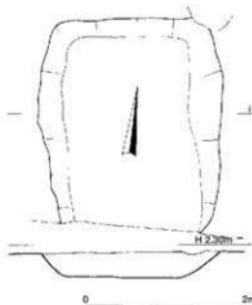


図49 土壙142 (1/60)

出土遺物（図50、表2）覆土中から少量の遺物が出土した。器表の磨耗はない。糸切底土師器が全体の1/3ある。さらに青磁、白磁、土師質鍋がある。外に須恵器、甕棺、鉄滓または焼壁とみえる資料も含まれる。

807・808は糸切底土師器である。

809は高麗青磁碗か。

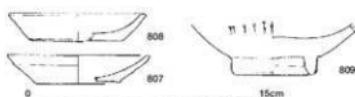


図50 土壙142出土遺物 (1/3)



図51 土壙143（東から）

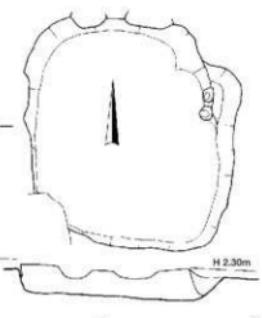


図52 土壙143 (1/60)

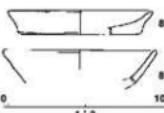


図53 土壙143出土遺物 (1/3)

土壙143 (図51・52)

土壙142に接して西側に位置する、隅円長方形の土壙であるが、東側の一部に突出部があり、別に重複の可能性が残る。断面は逆台形状である。長さ3.0m、幅2.8m、深さ0.4mを測る。覆土は一樣で暗灰黄褐色土に地山シルトブロックが混じる。

出土遺物（図53、表2） 覆土中から少量出土した。遺存状態はよいが、細片が主である。糸切底土師器のほかに李朝陶磁器、白磁、土師質・瓦質の擂鉢、古代の須恵器がある。

810は糸切底土師器皿で外底面の板目はない。811は李朝青磁か。

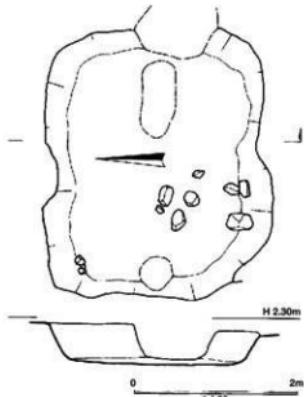


図54 土壌144 (1/60)

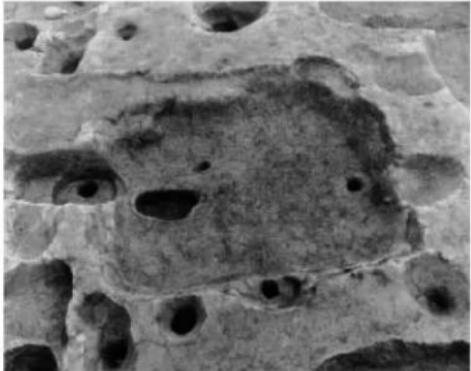


図55 土壌群 (東から)

土壌144 (図54・55)

調査区南辺部の土壌群のひとつである。不整な隅円長方形の土壌で、断面は逆台形状である。長さ2.7m、幅2.5m、深さ0.4mを測る。覆土中に掌大の礫を投入する。覆土は全体に一様で埋め立てられている。底面に薄い砂層が残る。砂層に覆われて掘削の工具痕のような条線が観察される。

出土遺物 覆土中から少量出土した。土器器表がやや擦れている。、糸切底土師器に体部が大きく開くものとその他の2者がある。ほかに青磁、白磁、陶器、土師質・瓦質の鍋、瓦質擂鉢がある。

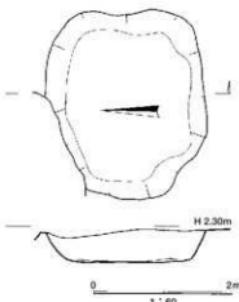


図56 土壌145 (1/60)

土壌145 (図56・57)

調査区南辺部の土壌群のひとつで、
土壌146と重複してそれより古い。

不整な隅円長方形の土壌で、断面は逆台形状である。長さ2.3m、幅1.9m、深さ0.4mを測る。覆土は全体に一様で、灰黄褐色粘質土、地山ブロックからなっており、明らかに埋め立てられている。底面に薄い粗砂層が残る。

出土遺物 覆土中から少量出土した。土器は細片で器表が擦れている。、糸切底土師器に胎土の精粗で2者がある。ほかに同安窯系青磁、玉縁の白磁碗、土師質の鍋、瓦質擂鉢がある。

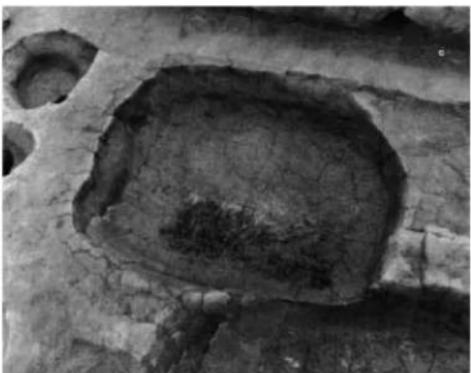


図57 土壌145 (北から)



図58 土壙146（北から）

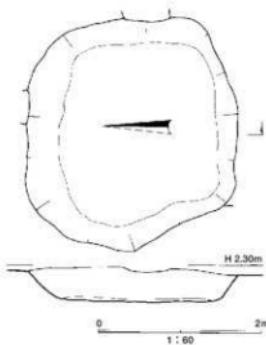


図59 土壙146（1/60）



図60 土壙146出土遺物（1/3）

土壙146（図58・59）

土壙145と重複して新しい。不整な隅円方形の土壙で、断面は逆台形状である。一辺の長さ2.6m、深さ0.4mを測る。覆土は全体に一樣で、褐灰色粘質土、地山シルトブロックからなっており、埋め立てられている。底面に薄く粗砂層が残る。

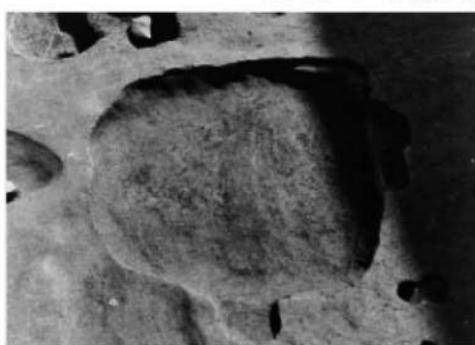


図61 土壙175（北から）

土壙175（図61・62）

調査区中央、溝1と1区の柱穴群との間の空間に位置する。隅円方形の土壙で、断面は逆台形状である。一辺2.2m深さ0.2mを測る。底面に薄い粗砂層が残る。

出土遺物 覆土中からごく少量出土した。土器は細片で器表がやや擦れている。糸切底土師器のごく細片、白磁碗皿、土師質の鍋がある。

出土遺物 (図60、表2) 覆土中から少量出土した。土器は細片で器表がやや擦れている。糸切底土師器には底部厚の大小で2者がある。さらに、同安窯系青磁、玉縁の白磁碗、李朝青磁、土師質の鍋のほか鉄滓がある。

須恵器はごく細片であるが、高台壺、壺がある。

812は李朝青磁碗である。

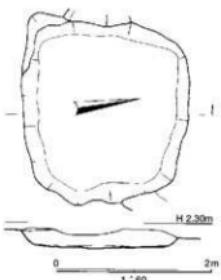


図62 土壙175（1/60）

土壤195 (図63・65)

調査区南辺部の土壤が最も密集している部分に位置する。土壤234と重複してそれより新しい。隅円長方形の土壤で一部が調査区外となる。断面は逆台形状である。長さ3.1m、幅2.2m以上、深さ0.3mを測る。覆土は全体に一様で、明らかに埋め立てられている。底面に薄い粗砂層が残る。

出土遺物 (図64、表2) 覆土中からごく少量出土した。土器は細片で器表が擦れている。系切底土師器に底部から大きく開く体部をもつ資料がある。青磁には龍泉窯系の碗が複数ある。ほかに土師質の鍋がある。古代の須恵器が混じっており、坏蓋、坏身といった器形がある。

刀子の断片とみられる鉄製品がある。

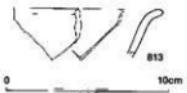


図64 土壌195出土遺物 (1/3)

土壤198 (図66・67)

調査区南辺部の土壤群のひとつである。土壤199と重複してそれより新しい。隅円長方形の土壤で、断面は逆台形状である。長さ2.7m、幅2.4m以上、深さ0.5mを測る。覆土は全体に一様である。底面に薄い粗砂層が残る。

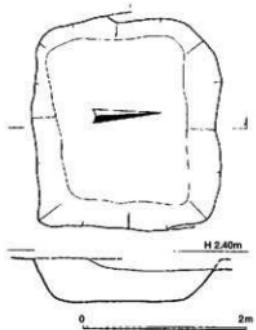


図66 土壌198 (1/60)

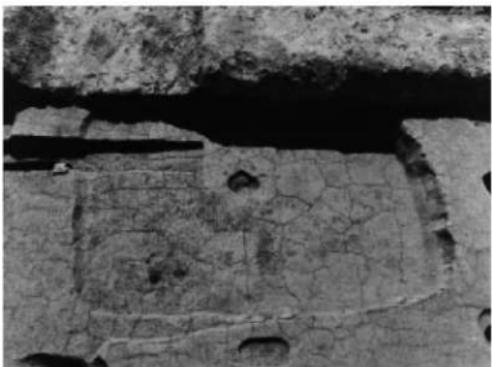


図65 土壌195 (北から)

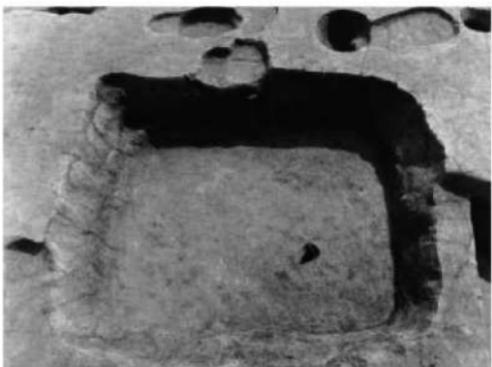


図67 土壌198 (北から)

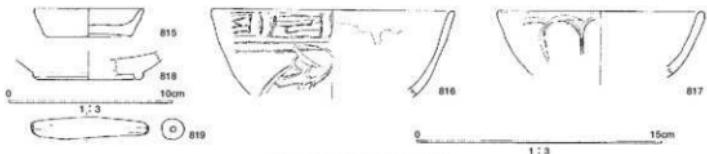


図68 土壤198出土遺物 (1/3)

出土遺物 (図68、表2) 覆土中からコンテナ1/5程の分量出土した。同種土壤と比べ遺物量が多い。大半は細片の資料で、器表がやや擦れている。出土土器の7割は糸切底土師器である。龍泉窯系青磁、同安窯系青磁、瓦質土器火鉢、須恵質瓦、などがある。古代の須恵器、土師器高台碗が含まれる。

815は糸切底土師器皿である。口縁端部に煤が付着しており、灯明皿として使用されたものか。

818は白磁碗である。

816・817は龍泉窯系青磁碗である。816は口縁部に雷文帶、817は蓮弁文を施す。

819は管状の土錐である。

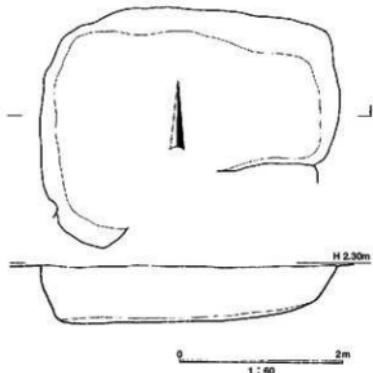


図69 土壌199 (1/60)

土壌199 (図69-70)

調査区南辺部の土壤群に属す。土壤198と重複してそれより古い。梢円形に近い隅円長方形の土壤で、断面は逆台形状である。長さ3.7m、幅3.0m以上、深さ0.5mを測る。土壤198とともに他の土壤より深い。覆土は全体に一様である。底面に薄い粗砂層が残る。

出土遺物 (図71、表2) 覆土中からコンテナ1/5程の分量出土した。大半は細片の資料で、器表の擦れがある。出土土器の3割は糸切底土師器で、壺が主である。皿はやや大形である。体部が大きく開く資料がある。

823・822・821・820は糸切底土師器壺である。いずれも外底面に板目は見られない。

824は白磁玉縁碗である。

825は青磁碗である。軸は高台外面に及び、薄く高い高台疊付に目痕が残る。

826は粉青沙器、外面に型押しによる白土象嵌を施す。

827は陶器短頸壺である。

829・831・830・828は管状の土錐である。いずれも手捏ねによる成形が行なわれている。

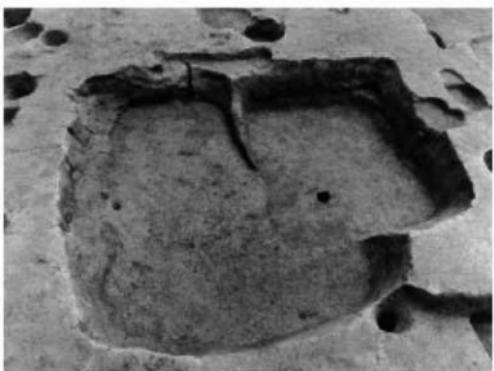


図70 土壌198・199 (西から)

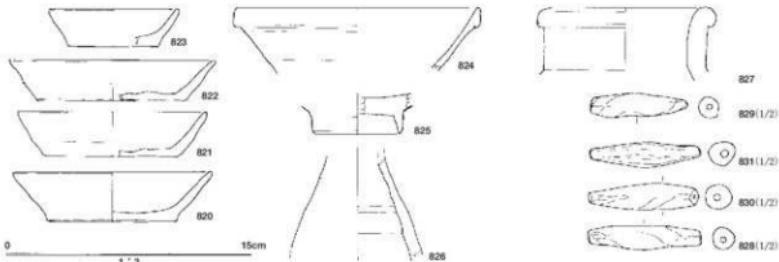


図71 土壌199出土遺物 (1/3・1/2)

土壌235 (図73-74)

調査区南辺部の土壌群の中でも特に密集する位置ある。先述した土壌193との間に、重複関係にある2基土壌234・232を置いて古い土壌である。梢円形に近い隅円長方形の土壌で、断面は逆台形状である。長さ19m、幅15m、調査面からの深さ0.5mを測り、形状のわりに深い。覆土は暗灰黄色シルトのブロックで、全体に一様である。底面に薄い粗砂層が残る。

出土遺物 (図72、表1) 重複する土壌234の覆土中からごく少量の土器細片が出土した。系切底土師器で、器表はやや擦れている。

土壌327 (図75)

1区柱穴群の東側に位置する。柱穴の分布範囲にあり、それらと複雑に重複している。形状は不整で、あるいは整地層などの一部かもしれない。

出土遺物 (図76、表2) 覆土中から少量出土した。細片の資料のはかに完形に近い資料がある。土器だけでなく陶磁器にも擦れを生じている。土器類のほとんどは系切底土師器で、1点をのぞいて外底面に板目は見られない。坏の体部はやや内湾気味に立ち上がる。青磁には龍泉窯系青磁蓮弁文碗、口禿の白磁皿がある。陶器壺もある。

866・868・867は系切底土師器坏である。

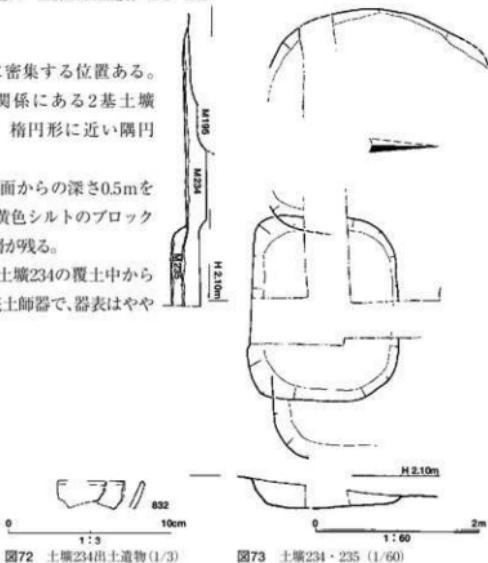


図72 土壌234出土遺物 (1/3)

図73 土壌234・235 (1/60)



図74 土壌235 (北から)

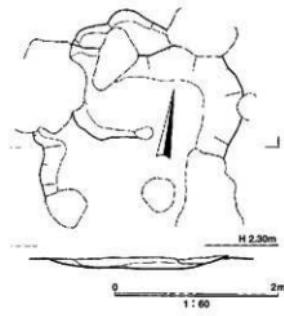


図75 土壌327 (1/60)

865は石製分銅である。黒色で緻密な石材を用い、角柱の上端を丸めた形に整形している。上端部の横方向の穿孔と上方からの穿孔とがつながって紐穴となっている。重量36.1gである。

土壌416 (図77-78)

2区で溝3に沿うようにして並ぶうちの東端の1基である。小穴と重複して古い。楕円形に近い

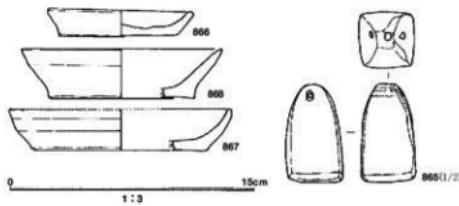


図76 土壌327出土遺物 (1/3・1/2)

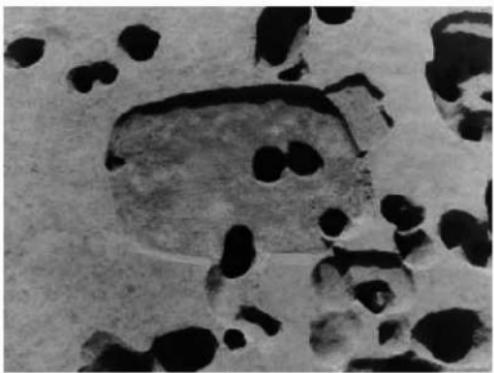


図77 土壌416 (北から)

長方形で、断面は逆台形状である。長さ2.0m、幅1.4m、深さ0.1mを測る。底面に薄い粗砂層が残る。

出土遺物 覆土中からごく少量の土器が出土した。糸切底土師器、瓦質擂鉢、青磁がある。いずれもごく細片である。

土壌436 (図79-80)

2区、溝3に沿って並ぶうちの1基である。楕円形に近い長方形で、断面は逆台形状である。長さ3.4m、幅2.6m、深さ0.4mを測る。覆土は黒褐色シルトで地山シルトブロックを多量に含む。底面に薄い粗砂層が残る。

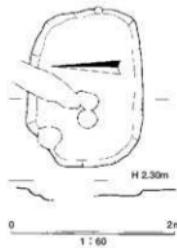


図78 土壌416 (1/60)

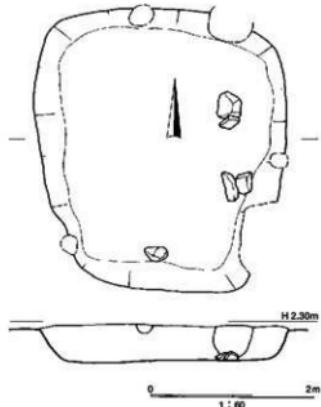


図79 土壌436 (1/60)

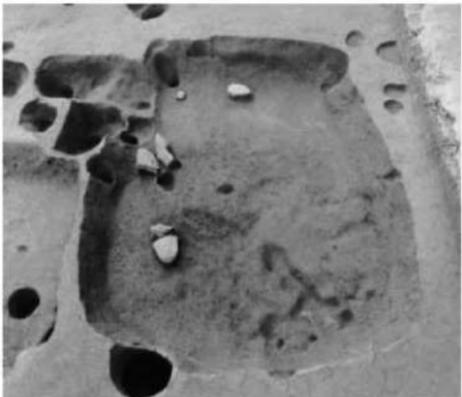


図80 土壌436 (北から)

出土遺物 覆土中からごく少量の遺物が出土した。土器はいずれも細片で器表はやや擦れている。糸切底土師器、白磁碗、土師器擂鉢のほかに古代の須恵器、土師器甕さらに、鉄滓がある。

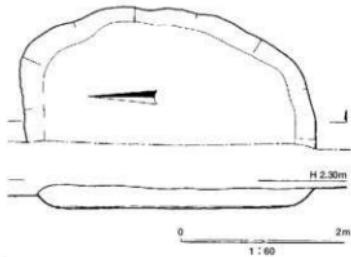


図81 土壌439 (1/60)



図82 土壌439 (東から)

土壤439 (図81・82)

2区、やや北に寄って調査区外にかかる。梢円形に近い長方形で、断面は逆台形状である。長さ3.0m、幅1.4m以上、深さ0.2mを測る。覆土は一樣で、底面に薄い粗砂層が残る。

出土遺物 覆土中からごく少量の遺物が出土した。土器はいずれも細片で器表は擦れている。糸切底土師器、青磁碗、白磁碗、陶器、古代の須恵器がある。

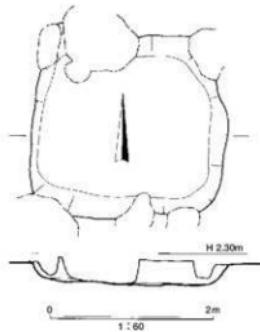


図83 土壌440 (L/60)

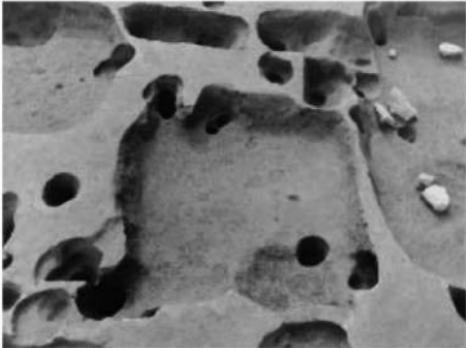


図84 土壌440 (北から)

土壌440 (図83・84)

2区、溝3に沿って並ぶうちの1基で、土壌436に接している。隅円の方形で、断面は逆台形状である。一辺が2.0m、深さ0.2mを測る。底面に薄く粗砂層がある。

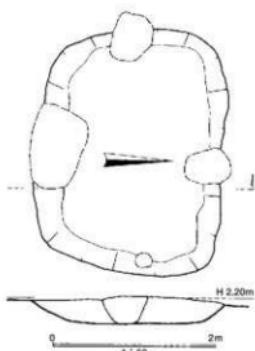


図85 土壌441 (L/60)

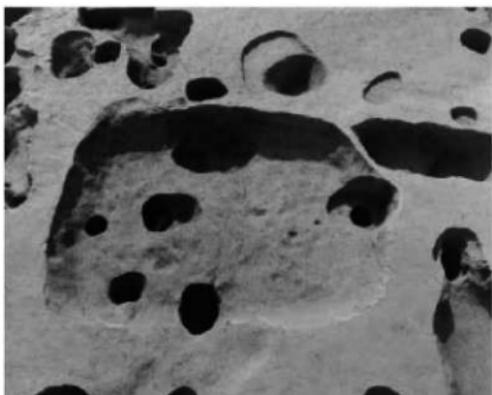


図87 土壌441 (北から)

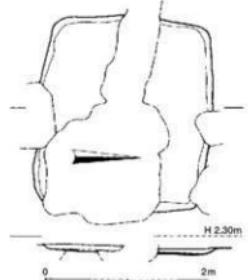


図86 土壌441出土遺物 (L/3)

出土遺物 覆土中からごく少量の遺物が出土した。土器はいずれも細片で器表は擦れている。糸切底土師器、龍泉窯系青磁、白磁皿・碗、瓦質擂鉢、砥石がある。

土壌441 (図85-87)

2区、溝3に沿って並ぶうちの1基である。楕円形に近い隅円の長方形で、断面は逆台形状である。

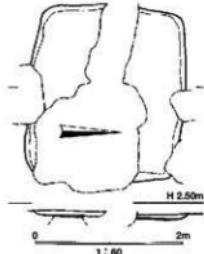


図88 土壙448 (1/60)



図89 土壙448出土遺物 (1/3)

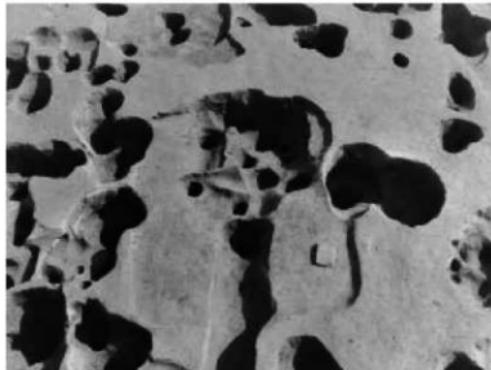


図90 土壙448 (西から)

長さ25m、幅1.9m、深さ0.3mを測る。底面に薄く粗砂層がある。

出土遺物 (図86、表2) 覆土中からごく少量の遺物が出土した。土器は細片で遺存状態が良好な資料がある。糸切底土師器、陶器、土師器擂鉢、磨石がある。

土壙448 (図88-90)

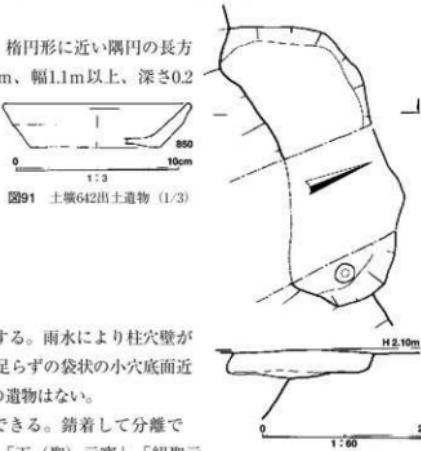
2区、溝3に沿って並ぶうちの1基である。小穴により大半を破壊されている。隅円の長方形で、断面は逆台形状である。長さ20m、幅1.8m、深さ0.1mを測る。底面に薄く粗砂層がある。

出土遺物 (図89、表1) 覆土中からごく少量の遺物が出土した。土器は細片で遺存状態が良好な資料がある。糸切底土師器、青磁碗、口禿の白磁碗、陶器、土師器鍋、瓦質擂鉢がある。

土壙642 (図92)

2区、溝3と重複して古く、一部が遺存する。楕円形に近い隅円の長方形で、断面は逆台形状である。現状の長さ2.9m、幅1.1m以上、深さ0.2mを測る。底面に薄く粗砂層がある。

出土遺物 (図91、表1) 覆土中からごく少量の遺物が出土した。土器は細片で器表が擦れている。糸切底土師器壺である。



5 その他の遺構

遺構202 (図93-94)

1区の柱穴群中、建物646にあたる地点に位置する。雨水により柱穴壁が崩落した結果確認できたものである。径が0.2m足らずの袋状の小穴底面近くで置いたようななかたちで銅錢が出土した。他の遺物はない。

出土遺物 (図95、表2) 銅錢を13個体確認できる。錯着して分離できない資料もある。錢面を判読できたものは、「天(聖)元寶」、「紹聖元寶」、「元豐通寶」、「淳化元寶」、「熙寧元寶」、「景(祐)元寶」、「元寶通寶」がある。

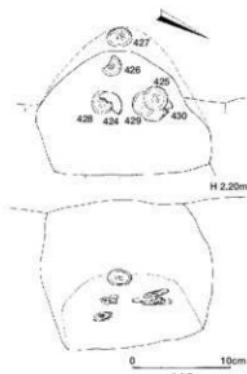


図93 遺構202 (1/5)



図94 遺構202 (南から)

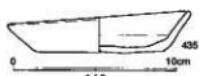


図95 遺構222出土遺物 (1/3)



図96 遺構222 (東から)

遺構222 (図96)

1区の柱穴群中、建物647にあたる地点に位置する。遺構確認面の清掃時に検出した。糸切底土師器壊を正置した中に、銅鏡1枚を置き、上に礫を乗せた状態で出土した。

出土遺物 (図95、表2) 銅鏡は1枚出土したが、腐蝕が著しく銘は不明。

435は糸切底土師器壊である。外底面に板目がある。口径112mm、底径80mm、底径21mmを測る。

遺構636 (図98)

2区のほぼ中央部に位置する。土壤状のくぼみに糸切底土師器を一括投棄している。遺構の形状は不整な小穴が集合したような状態で0.7m×0.4mの範囲に土器が集中して出土したものである。

出土遺物 (図97、表2) 接合復原できる資料は少數であった。874・871・872・870・873は皿、875は壺である。いずれも外底面に板目は見られない。

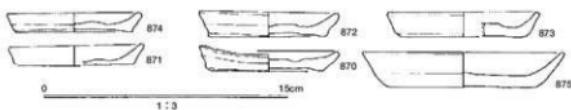


図97 遺構636出土遺物 (1/3)

5 その他の遺物

986・988は白磁である。986は切り高台の皿、988は内底面を搔き取る碗である。

989は瓦質土器鍋、990は土師器擂鉢である。11は巻き造りのガラス小玉である。993は文字の線刻のある土師器杯底部である。473は石塔の破片である。3は、円盤形石斧と考えられる資料である。素材の用い方に疑問がのこる。

図100に銭銘の判別できた銅錢を示す。遣構出土のものと採集資料とがある。



図98 遣構636（北から）

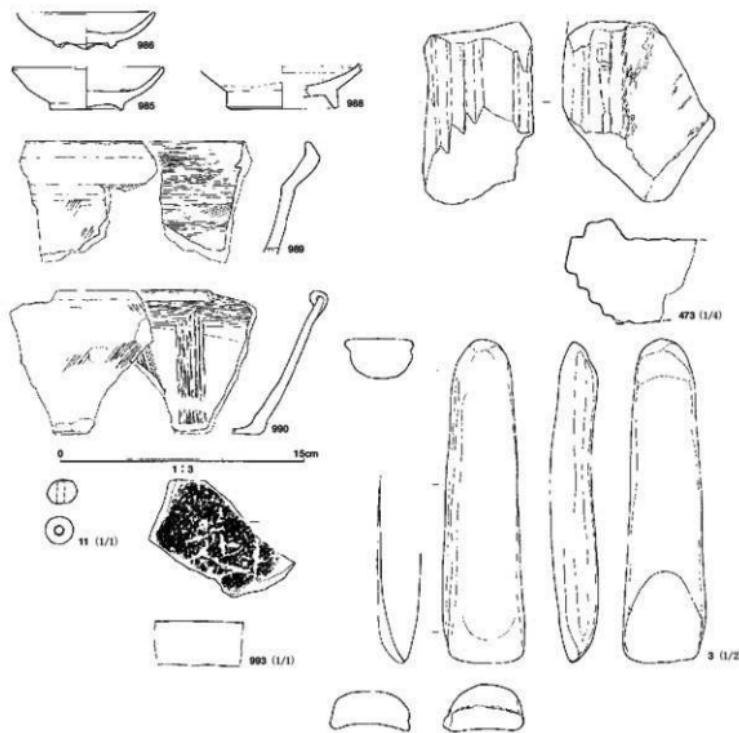


図99 柱穴・遣構以外出土遺物（1/1・1/3・1/2・1/4）

III おわりに

下山門乙女田遺跡第3次調査地点は、第1次地点と第2次地点との間にあって、両地点の調査で検出された柱穴群の広がりの一部と見られる柱穴群を検出した。いずれの地点においても疎密の偏りがあり、結果として複雑に重複しているようである。本地点では一部の柱穴について、建物としての復原を試みたが、確実なものではない。また、個々の年代を明らかにできないが、遺物総体として平安時代末頃から室町時代おわり頃までの時間幅を考えることができよう。出土遺物でいえば、陶磁器の数量に加えて各地点、銅錢の数も少なくない。この点を見るならば、むしろ第1次地点から第2次地点まで比較的似たような状況が見て取れる。かなり広域に広がる、建物群というのも想定してよいのではなかろうか。そのなかに第2次地点に見るような、大規模な溝で区画する一角があったものとも考えられよう。

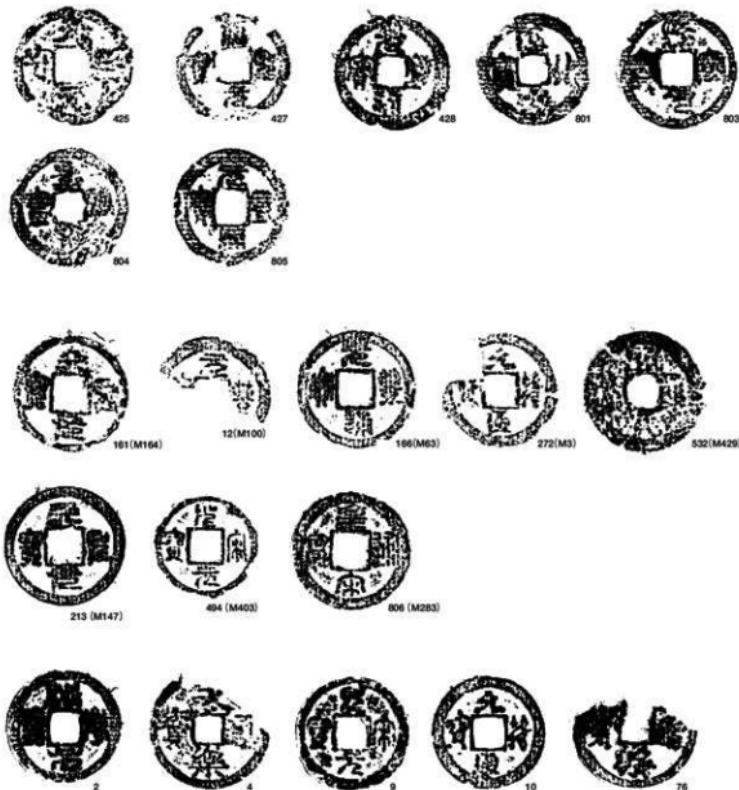


図100 銅錢 (1/1)

表1 报告遭物一覽 1

表2 報告遺物一覽 2

抄録

書名	下山門乙女田
調査名	下山門乙女田遺跡第3次調査報告
卷次	3
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	796
編集者名	杉山富雄
編集機関	福岡市教育委員会
発行機関	福岡市教育委員会
発行年月日	20040331
作成法人ID	
郵便番号	810-8621
電話番号	092-711-4667
住所	福岡市中央区天神1丁目8番1号
遺跡名	下山門乙女田遺跡 第3次
遺跡所在地	福岡市西区下山門3丁目470
市町村コード	40135
遺跡番号	2474
北緯	333431(日本測地系)
東経	1301854(日本測地系)
調査期間	20020801~20021110
調査面積	984
調査原因	共同住宅建築
種別	散布地／集落
主な時代	鎌倉時代・室町時代
遺跡概要	集落・室町・丹波16+溝3+土塁10+柱穴110+糸切底土師器+青磁+白磁+輸入陶器+在地系土器+輪器、瓦質土器+輸入土器(土師器、瓦器)+銅錢+石塔。散布地・平安・鎌倉?・輸入陶磁器。
特記事項	
備考	

下山門乙女田 3

-下山門乙女田遺跡第3次調査報告書-

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第796集

2004年3月31日

編集・発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

印刷 有限会社ブリコム

福岡市博多区冷泉町1-20